

「生い出ずる石」における階級と人種

神 垣 享 介

序

われわれはすでに、アルベール・カミュの中短編集『追放と王国』(1957)の掉尾を飾る一編である「生い出ずる石」について、そこに頻出する「glisser (滑る)」のイメージを中心として分析を行った¹⁾。しかしながら、そこでは扱うことができなかつたいくつかの興味深いテーマがわれわれには残されている。本稿では、「生い出ずる石」に見られる階級や人種の問題を主として取上げる。周知のように、「生い出ずる石」はカミュ自身が1949年の6月から8月にかけて行った南米での講演旅行の際のブラジルでの見聞から想を得ている。しかし、主人公ダラストはカミュの創造人物であり、またもう一人の中心人物である教会に石を運ぶコックも、実際にカミュがそうした行為をする人物を目撃した以外はまったくの創造人物である(実際の人物は石を教会に運ぶが、コックは途中で挫折する)。さらには、そのほかの登場人物についてもカミュの創造人物であるか、実際にモデルが存在したとしても彼らが担うことになる役割はほとんどがカミュ自身によって手が加えられているように思われる。そうした登場人物たちを考察することによって、この作品に内在する階級や人種のヒエラルキー構造を明らかにし、そして最終場面でダラストがコックに代わって石を教会ではなくコックの小屋に運ぶことで再び自らのアイデンティティを回復する過程を見ることができると思われる。そのためにわれわれは以下のような問題に取り組みたい。Ⅰ)ダラストが貴族の先祖を持つ人物として設定され、そして黒人のコックが彼をcapitaineと呼ぶ理由を考察する。Ⅱ)作品に登場する有力者たち(notables)に焦点を当てる。Ⅲ)黒人たちも、有力者たちと同様に単な

る図式的な人種や階級のカテゴリーには収まりきれない内実を示していることを見ていく。Ⅳ) 最終場面でダラストはバルコニーから通りに下り、コックのところへ赴くとき、ごった返している群集に対して「彼は自分に道を開き」(p.1682)²⁾、そしてコックに代わって石を彼運ぶとき「決然と群集の列を割る」(p.1684)が、そうしたイメージがそこに現れるのにはそれなりの理由が存在していることを、物語にちりばめられたイメージと関連付けて分析する。

I

物語の主要登場人物は、ブラジルの奥地のイグアペに堤防を建設しにきたフランス人技師ダラストと、黒人のコック（名前ではなく船のコックという職業に由来する呼称）である。彼らは、その人種、名前、職業によって互いに最も隔たった階級性を示しているのは明らかである。なぜなら、白人と黒人の支配／被支配の関係は歴史的事実であり、名前について言えば、ダラスト (d'Arrast) という苗字そのものが貴族の刻印を留めているのに対して、コックは職業名でしか示されないからである。さらには職業についても同様である。イグアペに到着した翌朝、ダラストは町長と判事に会うが、彼らにとって重要なのはダラストという個人よりも「技師」という職業であるように思われる。「町長は小柄な身体をぴんと張って駆け寄り、「技師さん」の上半身を両腕で包もうとした」(p.1662)。「私（判事）は技師さんをお迎えすることを誇りに思います。(・・・)水を支配し、河を制御すること、なんと偉大な職業でしょう」(p.1663)。それに対して船のコックという職業はどうであろうか。作中ではコックという職業についてのコメントはないが、杉本淑彦はジュール・ヴェルヌを論じた本のなかで黒人について「彼女ら彼らが白人と同格の人間として登場することはまったくありません。大部分は白人に仕える召使い、それ以外には下級船員（料理番）という職種が与えられたのです³⁾」と記している。さらには、「奴隷制の伝統の残滓をかすかに垣間みることのできるブラジルでは、これまで、料理法に関わ

る事柄は大方、下層階級に属する人たちの領分であった」⁴⁾、と田所清克は指摘している。つまり歴史的には、船のコックという職種そのものが黒人の仕事としてステレオタイプ化していたのであり、ブラジルでは料理人という職業そのものが負のイメージを帯びているのである。したがって、ダラストとコックはヒエラルキー構造において最も上位と下位に属していると言うことができる。こうした二人が友情を結ぶような設定を何故カミュが選んだのかについては、比較的簡単に推定できる。『手帖』には貴族（性）についての記述がいくつかあるが、それらはほとんど「生い出ずる石」の構想時期と重なっている。1953年の10月から翌年の5月までの間にカミュは次のように記している。「貴族社会の唯一の源泉は民衆である。その中間には何もない。この何の役にも立たないものがブルジョワジーであり、それは、150年前から、世界に一つの形を与えようと努めながら、手にしたものと言え、虚無と、まだその古い根だけで生き長らえている混沌だけであった」⁵⁾。この物語では、民衆はコックに代表される貧しい黒人や、町や公園で見受けられるガウチョ（カウボーイ）、混血のインディアン、日本人といった人々であろう。そして、ブルジョワジーに相当するのが有力者であろう。さらにカミュは1954年の11月に真の貴族性について、「どんな社会も貴族性を礎としてきた。というのも、貴族性、真の貴族性とは自分に課する要求（*exigence*）であり、その要求がなければ、どんな社会も死に絶えてしまうからである」⁶⁾と記している。だが、最初からダラストは真の貴族性を帯びているわけでない。まず彼は有力者たちによって彼らのメンバーの一員として迎えられ、最終的には民衆であるコックの石を自らに課することによってその真の貴族性を暗示するのだと考えられる。

ところで興味深いのは、コックはダラストと出会ったときから、彼を *capitaine* と呼び続けることである。コックによって何度も口にされるこの *capitaine*⁷⁾ は一つの訳には収まらないいくつかの意味を含意しており、それらの意味をダラスト自身が同時に具現化している（無意識ではあるが）ように見える。*capitaine* という言葉が最初に発せられるのは、コッ

クが運転手のソクラテスによってダラストに紹介されたときである。「私の話に興味あるかい, capitaine」。それに対してダラストは「私は capitaine ではない」と答えるが、コックは「そんなことは何でもない。でもあなたは貴族 (seigneur) だ。ソクラテスはそう言った」(p.1669) と言い返す。もちろん、ここで彼が capitaine と呼びかけるのは、船のコックである彼が船上で最も上位に位置する者、すなわち capitaine (船長) にダラストをなぞらえているからであろう。だがここで留意する必要があるのは、コックの頭の中には capitaine = seigneur という図式があることである。祖父の代までは貴族であったが、自分は貴族ではなく、今ではフランスには貴族はいない、とダラストは説明する。コックは「それではみんなが貴族なのだ」と理解するが、「そうではなく、貴族も民衆もいないのだ」と彼は答える。それでは「誰も苦しんではいないのか」というコックの問いに、「多くの人間が苦しんでいる」と彼は言う。「それでは、それが民衆だ」とするコックに、ダラストは「そういうことなら、民衆は存在する」と同意するが、「しかし、彼らの主人は警察もしくは商人だ」と付け加える。彼の言葉を聞いてコックは、「売ったり買ったり、なんて汚いことだ。警察と一緒になら犬でも命令する」(p.1669) と反応する。ここで注目すべきは、素朴に貴族制を信じているコックは警察や商人にはあからさまな敵意を示すが、貴族に対してはそうでないことである。それゆえに、seigneur を含意する capitaine でダラストを呼び続けるのであろうし、それにはそれなりの理由があるように考えられる。なぜなら、この capitaine = seigneur という図式は、ブラジルでは歴史的な過去を持っており、コックがそのように理解していたとしても不思議ではないように思われるからである。ポルトガルの植民地であったブラジルに1535年から1822年かけてカピタニア制 (capitainerie) が導入された。カピタニア制とは簡単に記せば、ブラジルを15のカピタニアに分割、それをカピタン (capitaine) と呼ばれる被譲与者あるいは分譲権者に譲与する制度であり、そのカピタンに応募したのはポルトガル貴族であった⁸⁾。もちろん、この時代はコックたちの祖先である黒人がアフリ

カから奴隷としてブラジルへ連行された時代でもある⁹⁾。こうした歴史を有するブラジルでは、ダラストという名前そのものが彼を規定するのである。デビッド・F・ウォーカーが指摘するように、「イベリア人の先祖を持つヨーロッパ人 — 彼はスペイン語を話し、彼の名前はポルトガル語またはスペイン語話者の耳には親しみあるように響くだろう — であるダラストは、たとえ不本意であっても、ポルトガル人によるブラジルの植民地支配に関わっているのである」¹⁰⁾。ところで、カピタニア制でのカピタンについてもう一つ付け加えて置けば、「主君がカピタン・ドナタリオに譲渡した特許状のなかで、主君は彼らに軍事、裁判、行政上の特権の一部を委任」¹¹⁾していたことである。ここでは、カピタン (capitaine) が裁判権や行政権を有していたことが注目される。それは、作中で言及されるもう一人のcapitaineとも関連するからである。

コックによって物語に導入されたcapitaineという語は、もう一人のcapitaineにわれわれの関心を向かわせる。イグアペ到着の翌日、ダラストは町長と判事に会い、下の区域の視察に行きたい旨を伝える。それに対して町長は、その前に有力者たちに会う必要があると答える。「有力者たちとは誰のことか」と問うダラストに町長は次のように言う。「たとえば、町長としての私、ここにおられるカルヴァルホー氏 (判事)、港湾長 (le capitaine du port)、そして何人かのそれほど重要でない者たち。もっとも、彼らの相手をする必要はありません。彼らはフランス語を話せませんので」(p.1663)。ところで、町長が挙げる最も重要な三人の有力者に数えられる港湾長は、物語に決して姿を見せることはない。では、なぜこの港湾長にわざわざカミュは言及したのであろうか。考えられるのは、同じcapitaineという語によって規定される彼の代役を、ダラストに担わせようとしたからではないかということである。プチ・ロベールによれば、港湾長 (capitaine de port) は「港の監視と警察の任務を担う者」と定義されている。さらにプチ・ロベールに従えば、港湾長のオフィスがcapitainerieであり、それはフランス語ではカピタニア制と同じ語なのである。警察の任務を内在する港湾長の定義は、ダラストの

印象からほど遠いように思われる。しかし、有力者たちには、彼はそうした任務を帯びた存在であるかのようである。そのことを、泥酔した警察署長 (chef de police) がダラストのパスポートに難癖をつけたことで、彼を罰する権利を彼らがダラストに委ねるエピソードが示している。もちろん、人を罰する権利は司法に属するものであるが、「彼ら (民衆) の主人は警察だ」というダラストの警察には、それと一体になった判事も含まれていよう。カピタニア制におけるカピタンが裁判権を有していたことを思い起こそう。このように capitaine という語は、この作品では裁判権や警察をも暗示していると考えられる。それゆえ、最終場面で町役場のバルコニーにダラストが判事と警察署長とともにいる構図は、capitaine と呼ばれることで彼の存在そのものが、彼の意思に関わらず、彼に内在する歴史的、階級的、職能的含意を反映していると考えられる。しかし、判事と署長が君臨するバルコニーから下り、石 = 重荷に苦しんでいる民衆のコックのもとに駆けつけることで、彼が帯びている「民衆の主人」である判事や警察という含意を払拭する。そして、「ああ！ capitaine。ああ！ capitaine」(p.1684) というコックの呼びかけに促されるかのように彼に代わって石を担うのである。このことによって、capitaine = seigneur であるダラストは、コックの石 = 重荷を「自らに課する要求」とすることで真の貴族性を示すのだと考えられる。さらには、この capitaine という呼びかけの後に、「涙が彼 (コック) の声を溺れさせた (noyèrent)」という文が続くことで、capitaine のもう一つの意味、すなわち「船長」の意味も含意される。なぜなら、船長が溺れている人間を助けることは当然だからである¹²⁾。

以上で考察したように、「生い出ずる石」は capitaine という語をめぐって、貴族の名前を有し、そして有力者たちによって判事や警察の職務を期待される主人公ダラストが、最終的には「真の貴族」や「船長」の役割を引き受けることで「ふたたび始まる人生」(p.1686) を予感する物語だということができるだろう。

II

社会のマイクロコスモスを象徴するようなイグアペにおいては、有力者たちは一般社会でのブルジョワジーに相当する、とすでに記した。しかし一口に有力者たちと言っても、彼らの間にも歴然とした格差があることは町長の言葉によって明らかである。そのことを如実に示しているのが、ダラストが町長と判事に会った後で、有力者たちが彼を歓迎するために集まっているクラブに車¹³⁾で赴く場面である。最も重要な三人の有力者、すなわち市長、判事、ダラスト（港湾長の代役としての）は車のなかにいるのに対して、外を歩いている他の有力者たちは、「ガウチヨ（カウボーイ）、混血のインディアン、日本人、そして彼らの黒っぽいスーツがここではエキゾチックに見えるエレガントな有力者たちからなる雑多な群集」（p.1664）の一部として示されているにすぎない。自分たち三人以外に「何人かの（quelques）それほど重要ではない」（p.1663）有力者がいるとの町長の説明にも関わらず、クラブでは「有力者の数は多かった」（p.1664）。イグアペがわずか「百軒ほどの家」（p.1663）からなっていることを考慮すれば、住民のかなりの割合が有力者（ほとんどは白人であろう）に入るのではないだろうか。ところで、町長と判事を他の有力者たちから区別する最も大きな目印は、ダラストと最初に会った時に彼らが着ている服の色である。「判事は、町長と同じく、マリンプルーの服を着ていた」（p.1663）。この物語では、青は多くの場合、権力に結び付いた色として示されている。「（民衆の）主人が警察や商人」であるようなヒエラルキー構造そのものを支えているのはキリスト教＝教会であろう。イグアペの教会は「植民地スタイルの、青と白の教会」（p.1664）であり、その「十段ほどの階段は青い石灰で塗られており」（p.1680）、その教会の二つの塔は「青と金色」（p.1680）である。そして、判事の家的美丽なバロック風の階段も「青い石灰で塗られている」（p.1680）。それに対して、彼ら以外の有力者たちが着ているのは常に「黒っぽいスーツ（complets sombres）」なのである。ところで、南米旅行での見聞が収められ、「生い出ずる石」の原資料ともなっている『旅日記』

には有力者たちの服の色の記述はない。カミュが物語で服の色に言及するのは意図的であり、それによって彼らの間の歴然としたヒエラルキーを示していることは明らかであろう。町長と判事以外の有力者たちが着ている「黒っぽいスーツ」は、その色によって象徴的に黒人たちに近い存在にもなりえているように見える（もちろん、スーツであるから黒人たちの着ている服とは雲泥の差があるのは言うまでもないが）。そのことを、行列でイエスの像を担ぐ彼らの描写が示しているように思われる。「黒っぽいスーツのなかで汗をかいている有力者たちによって担がれている多色の聖遺物箱の上にイエス様自身の人形あり、それは手に葦ひとがたを持ち、頭に荊をかむり、血を流し、群集の上でよろめいている」(p.1681)。もちろん、聖遺物箱とイエスの人形を担ぐことは有力者たちの特権であり、そのことが彼ら以外の者たちとの階級差を象徴していることは明白である。カリナ・ガドゥーレックは、ダラストがコックの石を教会に運ばない理由を、彼が「有力者たちに担がれた聖遺物箱」を見たことにその原因があるとしている¹⁴⁾。だが、彼女が問題としている場面では、有力者たちへの言及はなく、聖遺物箱としか記されていない。汗をかきながらイエスを担いでいる有力者たちも、バルコニーにいる主人たちに支配されている群集＝民衆の一部を構成しているように見える。ダラストがバルコニーを降りる前の構図として、彼らが担ぐキリストも、ダラスト、判事、署長とともに民衆の上にいることをウォーカーは的確に指摘している。「キリストの像を高く運んでいる群集は、三人の観客がいるバルコニーの近くに到着する。読者はこれら四人の人物——ダラスト、キリスト、判事、警察署長——が汗だくになっている群集の上に集結している象徴的な絵を想像する」¹⁵⁾。イエスの像を運ぶ有力者たちも今や群集の一部にすぎない。「遠くから、聖遺物箱の周りに凝集している群集が見えた」(p.1682)。そして群集は「年齢、人種、そして服装が一つの雑色の集団に溶け合って」(p.1682) いるのである。だが、この群集＝民衆に決して溶け込まないのが判事と警察署長なのである。

ところで、最も重要な有力者の一人と自負していた町長はどうなったか。有力者のクラブで、ダラストのパスポートを巡って署長に罰を求めている彼は、判事の家、次いで町役場のバルコニーの場面にはまるで自分の席を署長に譲ったかのように登場しない。それは「町長は儀式に参加する義務がある」(p.1679)からであるが、しかし彼の代理であるかのように署長がバルコニーに席を占める理由にはならない。それゆえ考えられるのは、そのことによってカミュが市長と署長の権力の逆転を象徴させようとしたからではないか、ということである。署長がこうした地位を得るには、おそらく判事の力が関わっていよう。署長がもともと有力者たちの一人であったかは不明である。彼がダラストに難癖をつけるのが、有力者のクラブでのことだからそのメンバーだとも考えられる。しかし、彼は判事を知っているようには見えない。なぜなら、「このとき、微笑みながら判事が、何が問題となっているのか尋ねにきた。その酔っ払いは一瞬自分の演説を中断させたこの華奢な人物をじろじろ眺め(・・・)新しい話し相手の目の前に、パスポートをもう一度ひらひらさせた」(p.1664)からである。署長が判事を知らないことは、彼らの階級差がいかに大きいかを示していよう。この後、彼を叱責するために「判事は彼のものとは思えないようなすさまじい声を初めてつけた」(p.1664)。そして「判事の最後の命令」で、彼は「罰せられた劣等生」(p.1664)のようにその場から消える。その後、判事は有力者たちと協議し、署長への罰の決定をダラストに委ねるが、彼はその必要はないと返答する。それに対して町長は、「罰は絶対に必要であり、罪人は拘束しておかねばならない」(p.1665)と主張する。町長の反論によってダラストは罰の決定を留保せざるを得ないが、留意すべきは、この時点では町長の力が署長よりも勝っていることである。つまり、行政が警察に勝っているのである(ただし、ダラストを港湾長の代役と考えれば、すでに警察が町長と同列にあるとも言えよう)。だが、署長に圧倒的な威圧感を見せつけたのは判事である。この後二度、彼の処罰が話題となるが、どちらの場合にもダラストにその話を向けるのは判事である。判

事の職掌柄それは当然であろう。二度目に処罰が話題になった折に、ダラストは「あの軽率な人物を自分の名において許してもらえらるなら、個人的な恩恵と例外的な好意と考えるだろう」(p.1672)と判事に提案し、彼もそれを受け入れる。そうであるなら「われわれは今夜署長と一緒に食事をしましょう」(p.1673)と判事は誘うが、ダラストはコックとの約束があるため辞退する。多分、判事は署長と食事を共にし、ダラストの決定を伝えたであろう。そして、署長はダラストと、そして処罰について取り仕切っていた判事に感謝し、彼らに恭順の意を示すであろう。判事にとってもその職業柄、警察の力は絶対に必要なのである。パスポートに端を発したエピソードは、判事と警察の結合という形でその結末を見たのである。そのことを示しているのが、翌日、署長が「クラブの広間」(p.1679)にいることである。彼は正式に有力者たちのメンバーとして認められたのであろう。町長は「儀式に参加する義務がある」(p.1679)ため、町役場には「判事と警察署長がダラストと一緒に行くことになる」(p.1679)と説明する。そして、まずダラストは署長と判事の家へ赴き、次いで、「判事、警察署長、ダラストは町役場に到達した」(p.1681)。二度も「判事、警察署長、ダラスト」のトリオに言及されているのは、車でクラブに向かった「判事、町長、ダラスト」の旧トリオとの権力の変化を強調しているように見える。判事の家から町役場に向かい、そのバルコニーに君臨する彼ら三人は、まるで行政の象徴である町役場を占拠した趣さえある。もちろん、先でも指摘したように、裁判権や警察を含蓄していたダラストはバルコニーを降りることで、そうした含蓄を払拭する。しかし、たとえ彼がバルコニーを離れようが、判事と警察が支配する構図に変わりはないのである。

Ⅲ

黒人の問題に移ろう。一口に黒人と言っても、彼らも物語では一つのカテゴリーに還元されてはいない。まずそれは肌の色について言える。カミュはブラジルを訪れたときの印象を次のように記している。「ここ

では、黒人といってもその色合いは大いに多様性に富んでいる¹⁶⁾。「生い出ずる石」では、彼らは黒人 (noir) と指示される以外に、肌の色合いによってニグロ (nègre) や白人と黒人の混血であるムラート (mûlatre) とも記されている。そしてニグロとムラートはその肌の色に加えて、背の高低さによっても識別されている。そのことを最もよく示しているのが、物語の冒頭部で車を渡し舟で運ぶ場面である。向こう岸から近づいて来る船の上には「黄色い光の中に、ほとんど黒い、上半身が裸の三人の小柄な (petits) 男たちがはっきり見分けられた」(p.1658)。その後、彼らは「三人のムラート」(p.1659)、「そのムラートたち」(p.1659) と記される。一方、ニグロは「二人の背の高い (grands) ニグロ」(p.1658)、「背の高いニグロたち」(p.1659)、「背の高い黒人たち (les grands Noirs)」(p.1659) となっており、いずれの場合でも背の高さが強調されている。

興味深いのは『旅日記』には背の高い黒人たちへの言及はなく、「麦藁帽子をかぶった数人のムラートたちが、これ以上あるまいというほど旧式な大きな渡し舟を、竿であやつって」¹⁷⁾ いる記述があるだけであり、ムラートたちの身長にも触れられてはいない。カミュが物語に背の高い黒人を導入した理由は二つ考えられる。一つは、ムラートと背の高い黒人の間にあるヒエラルキーを暗示するためであろう。物語では、竿で渡し舟をあやつっている¹⁸⁾ のは背の高い黒人であり、ムラートは渡し舟が棧橋に接岸したときに跳ね橋をおろすだけだからである。そして、彼らの立っている位置もそのことを示している。「下流 (l'aval) の方」(p.1658) にいるのは背の高い黒人であり、「前部に (à l'avant)」(p.1659) いるのはムラートだからである。しかし、ダラストが船に乗り込み、向こう岸に帰る場面では、「上流に向かって (face à l'amont)」(p.1659) 立っているダラストの姿が強調されることで「白人・ムラート・背の高い黒人」の序列が明らかとなる。もう一つの理由は、この渡し舟の場面を、アフリカの要素が支配するマクンバのそれと呼応させるためである。船の上でのヒエラルキー構造は、マクンバでは完全に逆転する。マ

クンバを取り仕切るリーダー (chef) は「背の高い黒人 (le grand Noir)」(p.1674) であり、ムラートであるコック¹⁹⁾ は一人の参加者にすぎず、白人のダラストは最後にはそのマクンバから排除されるからである。背の高さが明示される黒人は船の場面とマクンバの場面にしか登場しない。それゆえ、マクンバでの背の高い黒人は、その背の高さが三度 colosse (大男) (p.1657, p.1660) という語で強調されるダラストと対をなしているように思われる。この二人の関係については後ほど考察するとして、「生い出ずる石」にはコックに代表される黒人や背の高い黒人とは異なる範疇に属する黒人が登場している。

ダラストが初めて貧しい黒人たちが住む下の区域を訪れたとき、住民たちの小屋を見たいという彼の要請に応じて、コックの兄に「命令的な口調」(p.1666) で命じる黒人である。彼は港の指揮官 (le commandant du port) で、「白い制服を着た陽気な肥った (gros) 黒人」(p.1665) である。彼がムラートなのかそうでないのか不明であるが、ただコックと同じく「肥った」という属性を備えていることから、ムラートではないかと推測される。明らかなのは、「白い制服」が象徴しているように、彼は言わば白人化した黒人であるように見えることである。彼が命令的な口調を使ったので、「その男 (コックの兄) は、グループから離れ、ダラストに向き合い、しぐさで道を示した。だが、彼の視線には敵意があった」(p.1666)。敵意を含んだ視線は、ダラストに対してというよりも、同じ黒人でありながら命令する指揮官に向けられたもののように見える。なぜなら、コックに招待されてダラストが二度目に小屋を訪れたときには、「彼 (コックの兄) はダラストに再会しても驚いたようには見えなかった」(p.1673) し、「たいていはただうなずいていた」(p.1673) からである。しかし、黒人の指揮官が命令的な口調を使ったのはそれなりの理由があるのである。彼はダラストに「堤防は大雨の前に築かれるのか」(p.1667) と尋ねている。このことは、大雨の度に洪水の犠牲となる下の区域の住民を彼が気遣っていることを示しており、彼が命令的な口調で小屋を見せるように命じるのも、ダラストに住民の真の状況を

知ってもらいたいがためのものと推察できる。さらには、ここの住民は何で生計を立てているのかとのダラストの質問に、「彼らは必要とされるときに働く。われわれは貧しい」(p.1667)と答えている。彼の返答は、堤防工事が始まれば彼らが働けることを示していよう。何よりも、彼は「われわれは貧しい」と言うことで、自らのアイデンティティの所在を明らかにしている。それはこの直後に登場する判事が「彼ら」(p.1667)と呼ぶのと好対照をなしている。

最後に、マクンバに登場するリーダーである「背の高い黒人」を見ていくことにする。先でも指摘したが、「背が高い」と明示される黒人は渡し舟とマクンバにしか登場しない。イグアペの町に彼らが姿を現すことは決してない²⁰⁾。まるで、マクンバのときだけに現れるかのようである。そのことによって、マクンバの場面は「背の高い」黒人と、「背の高い」白人であるダラストが織りなすある種神話的、通過儀礼的雰囲気醸し出しているかに見える。マクンバの場面は模倣が伝播する場であり、それゆえ翌日の行列の場面でダラストが群集を「押し分け (fendre)」、「自らに道を開く」ための、背の高い黒人による模倣の伝授の儀式のようにも見える。模倣について言えば、たとえば、マクンバが行われる小屋には壁龕があり、そこには粘土でできた「角のある神」が「銀紙の並外れて大きな刀を振り回している」(p.1674)が、それと同じ振る舞いを「背の高い黒人」もするのである (p.1675)。何よりも、強烈な音楽と熱気のなかでダラスト自身が「自分自身がしばらく前から、足を移動させはしないが、全体重で踊っているのに気付く」(p.1675)のである²¹⁾。こうした模倣の伝播が支配する雰囲気の中で、「背の高い黒人」が二度にわたって彼を取り囲んでいる同心円を破る (fendre) 行為²²⁾をダラストは目撃するのである。最初は、腕を組んでいるダラストにそれを解くように言いにくる場面である。「リーダーは、踊り手たちの輪を破って (fendant) やって来た」(p.1674)。次いで、「その背の高い黒人は祭壇に向かうために、あらためてもう一度輪を破った (fendit)。彼は水のはいった椀と火のついた一本のろうそくを持ち帰り、そのろうそくを小

屋の真ん中の地面に打ち込んだ (ficha) (p.1675)。背の高い黒人の振る舞いは、翌日の行列でダラストによって模倣されるように見える。町役場のバルコニーから下りて、「全体重で人間の潮を遡りながら、彼は自分に道を開き (il s'ouvrit un chemin) (p.1682)、そして倒れたコックに代わって石を運ぶ彼は「決然と群集の最初の列を割った (fendit avec decision les premiers rangs)、群集の列は彼の前で脇に寄った (s'ecartèrent) (p.1684)、そして「群集は教会までの道を彼に開く」 (p.1684) ののである²³⁾。そして、石を教会ではなくコックの小屋に運んだ彼は、「足の一撃で扉を開け、一挙に部屋の真ん中に石を投げこんだ」 (p.1685)。この行為は背の高い黒人がろうそくを地面に打ち込んだことに対応していよう。なぜなら、「その石は半分埋まって (à demi enfouie) (p.1685) いるからである。これは日常生活では最も下の階級に属する背の高い黒人による、その名前によってもっとも高い階級に属するダラストが「出会いの機会」を自らの力で見出すための伝授であろうし、そのことがこの作品にロジェ・キーヨが指摘するような物語＝神話²⁴⁾の趣さえも与えるのであろう。そして、無意識ではあろうが彼を模倣することでダラストは貧しい黒人との友情の手がかり、すなわちコックの兄からの「われわれと一緒に座れ」 (p.1686) という呼びかけを得るのである。

IV

ダラストにとって、主体的に「自らに道を開き」、「群集を割る」行為がなぜ重要なイメージとして示されているのか考えてみたい。彼は公園で、伝説の生い出する石が収められている洞窟の前で、その石のかけらを持ち帰るために待っている群衆を見たことによって、自らの「待っている」心理的状況を思い起こす。「彼の周りで、巡礼者たちが待っていた (・・・) 彼も待っていた、(・・・) それが何かわからなかったが。(・・・) まるでここにやって来た仕事がかみでしかないかのように、彼もまた、彼には想像もつかないような、しかし世界の果てで辛抱強く

彼を待っていたらもう一つの驚きの、あるいは一つの出会いの機会を待っていた」(p.1668)。彼は受動的にある出会いを待っているにすぎないのである。そのことを如実に示しているのが、行列までは他者によって道を開けられ(譲られ)、それをただ受身的に受け入れている彼の姿であろう。

最初にそのイメージが現れるのは、渡し舟の場面でダラストが乗った車を船に載せる場面である。「車は(・・・)ムラートたちが両側に並んでいた(s'étaient rangés de chaque côté) 棧橋の端に達した」(p.1659)。車が道を開けられるこのイメージは、イグアペで有力者たちのクラブに赴く場面に引き継がれる。「彼ら(ガウチョ、混血のインディアン、日本人、有力者たち)は、急ぐこともなく(sans hâte)脇に寄り(se garaient)、車を通した」(p.1664)。ここで注目すべきは、ダラストという個人にではなく、車が象徴する富や権威に対して道が開かれることである。イグアペの群集が「急ぐこともなく」車に道を譲るのは、彼らの心理的抵抗の反映のようにも見える。それは、ダラストがコックの兄の小屋を最初に訪れた折に扉のところで、「彼(コックの兄)は、無言で、無表情な視線で技師を見詰めながら脇に寄った(s'effaçà)」(p.1666)という情景にも通じていよう。なぜなら、ダラストが小屋に入ることができるのは港の指揮官の命令によってだからである。そしてこの脇に寄り=消える(s'effacer)イメージは、コックによってダラストがマクンバから排除される場面に受け継がれる。白人と黒人のヒエラルキー構造が逆転しているマクンバでは、ダラストが所属する階級や権威は通用しない。それゆえ、マクンバの熱気の中で人が変わったようになったコックは、「見知らぬ人間」に話しかけるかのように、「もう遅い、capitaine。彼らは一晩中踊るだろう。だが、彼らはある人が留まるのを望んでいない」(p.1677)と言うのである。歴史的、階級的属性を帯びたcapitaineであるがゆえに、アフリカの要素が濃密なマクンバから彼は排除されると考えることもできよう。彼が小屋から排除される場面は、「入り口のところで、コックは竹の扉を押さえながら脇に寄った(s'effaçà)。そしてダ

ラストは外に出た」(p.1677)と記述されている。ここでの脇に寄り＝消える(s'effacer)行為は、コックの兄の場合とは逆にダラストを外に出す機能を果たしている。だがここでは、これまでのダラストとは異なり、自分ために開けられた道を受身的に受け入れる訳ではない。外に出た後、コックが一晩中踊ることで石を運べなくなることを危惧したダラストは、コックを連れ出すために彼に抵抗するからである。それは「踊りに来てくれ。その後で私を連れ帰ってくれ。さもないと、そこに残って、踊るから」(pp.1670-1)というコックの頼みを果たすためである。だが「コックは返事もせず、ダラストが片手だけで押さえている扉をすこしずつ押した。彼らはしばらくそうしていた、そしてダラストは肩をすくめて諦めた。彼は遠ざかった」(p.1677)。扉を片手だけで押さえることで抵抗するダラストの試みは失敗するが、彼が主体的に扉を押し返そうとするのが、fendreする背の高い黒人を見た後であることは注目してもよいだろう。翌日、町役場のバルコニーで、石を運んでいるコックを見失ったとき、彼は中途半端に終わった扉の場면을悔やんだであろう。そしてその失敗に終わったその場면을償うかのように、バルコニーを下り、自らに道を開き、そしてコックに代わって石を頭上に載せ、取り巻く群衆をfendreするのである。そして最後の仕上げとして、コックの兄の小屋を躊躇もなく「足の一撃で扉を開け、一挙に部屋の真ん中に石を投げ込む」(p.1685)のである。かくして、自分のために開かれた道を受身的に受け入れてきたダラストは、マクンバでの見聞の後、自らの意思で扉を押し返そうとするが失敗し、その失敗を贖うかのように行列では主体的に行動するのである。このように主体的に行動することを「自分に課する要求」とすることで、capitaineと呼びかけるコックに真の貴族性を示すことになるだろうし、それが彼自身にとっても「再び始まる人生」(p.1686)の予感ともなるのである。

結語

これまで見てきたように、「生い出ずる石」には単純な階級や人種の

カテゴリーには還元できない多様な人物やイメージが盛り込まれていることが了解されよう。ところでわれわれは、非常に印象的な一人の登場人物、すなわちコックの兄の小屋でダラストをその優雅な物腰で魅了する美しい黒人の娘（pp.1666-7）には言及しないできた。われわれは本論において、港の指揮官を別にすれば、黒人を二つのグループ（コックに代表されるグループと、渡し舟とマクンバの場面にもみ登場する背の高い黒人）に分けて考察した。しかし、彼女だけがその二つのグループに同時に属しているのである。まず、コックと血縁者であることによってムラートと考えられる。それゆえ、マクンバ以外のときにも姿を見せるのであろう。次いで、背の高い娘としてマクンバに現れることで、背の高い黒人にも属していると考えられる。興味深いのは、彼女はマクンバの場面以外では決してその背の高さに言及されることがないことである。最初に登場する彼女は「若い黒人の娘」「その若い娘」（p.1666）としか示されない。そしてダラストが小屋を訪れる二度目（p.1673）と石を運んだ三度目（p.1685）には、まるでその背の高さを隠すかのようにしゃがんでいる（accroupie）のである²⁵⁾。だがマクンバでは、「彼女たちはもう一人の背が高く（grande）、ほっそりした（mince）若い娘を囲んでいた。ダラストは突然、彼女が小屋の主人（l'hôte）の娘であることを認めた」（p.1677）と記され、われわれは初めて彼女の背が高いことを知るのである。それゆえ、彼女こそがダラストにふさわしい存在となるように思われる。なぜなら、その日常性においてコックたちに属し、その背の高さにおいて神話的黑人にも属することで、彼女だけが作品においてそのヒエラルキーが暗示された黒人たちを結ぶことができるからである。東浦弘樹は、ダラストがブラジルで「彼女と王国を打ち建てる」²⁶⁾可能性に言及している。そのような可能性を明示するような記述はないが、彼女だけがその身体の大きさによってダラストに釣り合う女性であることを考慮すれば、東浦の解釈もあながち根拠のないものとは思われない。

（天理大学准教授）

注

- 1) 拙論, 「アルベール・カミュの「生い出ずる石」について — glisserのイメージを中心に —」, 『天理大学学報』, 第59巻 第1号 (通巻 第216輯), 2007, pp.1-17.
- 2) Albert Camus, *Théâtres, Récits, Nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1974, (以下ではPL.Iと略す)。 *La Pierre qui pousse*からの引用は本文中, 及び注ではページ数で示す。引用の訳は拙訳によるが, 窪田啓作の翻訳 (『追放と王国』, 新潮文庫, 1973) を参考にした。
- 3) 杉本淑彦, 『文明の帝国 ジュール・ヴェルヌとフランス帝国主義文化』, 山川出版社, 1995, p.98.
- 4) 田所清克, 『ブラジル学への誘い — その民族と文化の原点を求めて —』, 世界思想社, 2001, p.112.
- 5) Albert Camus, *Carnets III*, Gallimard, 1989, p.106. (以下では *Carnets III* と略す)。引用の訳は大久保敏彦 (『カミュの手帖 1935-1959 (全)』, 新潮社, 1992) による。
- 6) *Ibid.*, p.135.
- 7) 本論中で言及される以外では, 「capitaineに, 私は従う」 (p.1671), 「あなたは capitaineだ。私の家はあるものだ」 (p.1672), 「あなたは誇り高い, capitaine」 (p.1672), 「いつもというわけではないよ, capitaine」 (p.1672), 「組んでいる腕を解けよ, capitaine」 (p.1674) とコックは呼びかけている。
- 8) 『新版世界各国史26 ラテン・アメリカ史Ⅱ』, 山川出版社, 2000, pp.130-134 参照。
- 9) 奴隷制時代のブラジルにカミュが関心を持っていたことは事実である。構想していた戯曲『ドン・ファン・ファウスト』において, カミュは彼を奴隷たちのいるブラジルに赴かせる考えを持っていたからである。 *Carnets III*, p.110. 参照。
- 10) David. H. Walker, “IMAGE, SYMBOLE ET SIGNIFICATION DANS 《LA PIERRE QUI POUSSE》”, in *Albert Camus II*, Lettres Modernes, Minard, 1982, p.88. ウォーカーは, d'Arrastという名前は, 「引きずる, 引っばる」を意味するスペイン語の arrastrar もしくはポルトガル語の arrastar に由来しているのではないかと推測している (p.102)。
- 11) Frédéric MAURO, *HISTOIRE DU BRÉSIL*, «Que sais-je?» Press universitaire de France, 1973, p.12. 引用の訳は金七紀男・富野幹雄 (『ブラジル史』, 白水社, 1980) による。
- 12) われわれは, ダラストが船のイメージを具現化していると論じたことがある。拙

- 論, 「アルベール・カミュにおける Navigation のイメージについて — 後期作品を中心として — 」, 『仏語 仏文学 第16号』, 関西大学仏文学会, 1987, 参照。
- 13) われわれはこの物語での車の機能についてすでに考察した。拙論, 「アルベール・カミュの「生い出する石」について — glisser のイメージを中心に — 」を参照。
 - 14) Carina Gadourek, *Les Innocents et les coupables, essai d'exégèse de l'oeuvre de Camus*, Mouton, 1963, p. 221.
 - 15) David. H. Walker, *op. cit.*, p. 97.
 - 16) Albert Camus, *Journaux de voyage*, Gallimard, 1978, p.92. 引用の訳は高島正明 (『アメリカ・南米紀行』, 新潮社, 1979) によるが, 文脈に応じて語句を変更した箇所がある。
 - 17) *Ibid.*, p. 121.
 - 18) 彼らの筋肉が強調されている。「背の高いニグロたちは動かなかった。頭上にあげられている両手は, やっと打ち込まれた竿の端を握っている。だが, 筋肉は緊張し, 水そのものとその重量からきているように見える断続的な痙攣が走っていた。」(p.1659)
 - 19) コックについての最初の記述は, 「黒いというよりもむしろ黄色い肌をした, 小柄 (petit) で, 肥って (gros), がっしりした男」(p.1669) である。それから黒人 (p.1669), そしてムラト (p.1669) と指示される。彼とダラストが並んで歩く場面では, 「コックは頭を上げ, そしてダラストに微笑んでいた」(p.1671) と記され, コックの背の低さとダラストの高さが強調されている。
 - 20) それゆえ, 渡し舟の上ではムラトと背の高い黒人のあいだに認められたヒエラルキーは, 日常生活では背の高い黒人が不在であることによって, イグアペでは下の区域に住むコックたちが「最も貧しい」(p.1667) 存在となるのであろう。
 - 21) コックの「首が, 長く絶え間のない震えを走らせる (parcourue)」と, 他の者たちの身体にも「足から頭まで痙攣が走り (parcouru)」, そして踊り手たちの「筋肉も神経も, 身体全体が一つの放射のなかで結ばれる (se nouaient)」と, ダラストの筋肉も「長く不動のダンスでこわばる (noués)」(p.1676) のである。さらには, 例の黒人のリーダーがトランス状態に入って倒れた黒人の娘たちの「こめかみを黒い筋肉質の大きな手 (sa grande main) で締め付ける」と, 「彼女たちは再び立ち上がる」(p.1676)。その立ち上がらせるイメージは, 行列で「肩の筋肉が明らかに一種の痙攣のなかでこわばって (noués)」(p.1683) 倒れたコックを, 「ダラストは彼を両腕に抱えて, 子供みたいにくらくくと彼を持ち上げた。彼はコックを自分に引き寄せて立たせていた」(p.1684) に引き継がれているように思われる。

- 22) 円 = 輪のテーマについては、イサシャロフの詳細な分析を参照。Michael Issacharoff, “ESPACE DU LANGAGE ET LANGAGE DE L’ESPACE: *LA PIERRE QUI POUSSE*, DE CAMUS” in *L’ESPACE ET LA NOUVELLE*, José Corti, 1976, pp.97-112.
- 23) 安藤麻貴は、「潮」に喩えられる群集にダラストが「割って (fend[re]) 入り、彼らが彼の前で「左右に分かれた」という描写は、ダラストに海を割るモーゼのような印象すら与える。つまり、潮という流れに逆らい、代名動詞《s’ouvrir》によって表されるように自らに「道 (chemin)」を開くことがダラストの王国の発見への鍵と考えられる」と指摘している。安藤麻貴、「生い出ずる石」から『最初の人間』へ — 流動性と不動性をめぐって —, 『カミュ研究 第7号』, 青山社, 2006, p.22.
- 24) PL.I, p. 2064.
- 25) 日常のヒエラルキー構造が逆転しているマクンバでは、反対にダラストが「しゃがみこむ (s’accroupit)」(p.1676) のである。だが、石を小屋に運び終わったとき、「にわかに巨大となった身体をまっすぐにして」(p.1685) と記されて、あらためて彼の並外れた大きさが強調される。
- 26) Hiroki Toura, *LA QUÊTE ET LES EXPRESSIONS DU BONHEUR DANS L’OEUVRE D’ALBERT CAMUS*, Eurédit, 2004, p. 388.